

COVID-19 パンデミック下での教育、そして大学図書館

新型コロナウイルス感染症の脅威に晒される状況下、大学教育も2年目を迎えます。2020年度は、これまで必要であるとの認識はあっても手付かずであったインターネットを活用した授業について、様々な取り組みをチャレンジし、授業を行い、学生の学習成果を評価するという教育の3要素のうちの最低限の部分は実施できたのかと思います。しかし、「目標」、「方略」、「評価」からなるこの3要素の本来の意味を捉え、「学生主体である教育の実践」という意味では、反省点が多くあるようにも思えます。教育は、「実施する」ことに意味があるのではなく、「それにより学生自身が変わる」ことが重要なわけで、そのための「学び」を提供することに注力すべきです。

2021年度は、大学全体として対面授業を中心としたものにシフトしていきます。これは、「新入生に大学生としての自覚を持たせる」、「友人や教職員との関わりから人として成長する」などの効果を期待したものです。ただ、これらは、授業本体よりは課外での活動に関わる部分が大きく、学生にある程度のリスクを覚悟して対面での授業に参加させる以上、「対面の授業にはオンラインと違ったどのような特性があるのか」を十分に解析して授業をデザインするということにも力を入れるべきです。「顔を見た方が伝わりやすい気がする・・・」というような曖昧なことではなく、「情報をただ伝えるだけでは、学生の学びにつながらない」という事実を受け止め、「対面かオンラインか」というような2者選択ではなく、両者の特性、そしてICTを取り入れた効果的な授業を見つけていくことが求められると思います。対面授業は始まりますが、これはコロナ禍前に戻るのではなく、新しいことが始まるのだと捉えるべきと思っています。

大学図書館においても、従来からの「情報を提供する」という機能だけではその価値は次第に低下していくと予想されます。インターネットを用いて教員・学生が容易に情報を入手できるという体制は、当然強化されるべきですが、さらに、「情報が交わり、加工され、そして新しい情報が生まれる」場としての大学図書館の機能も高めていく必要があります。学生に「学び」を提供するために大学図書館の役割は大きい、そして大きくなるべきだと思っています。皆様のご理解とご支援をお願いいたします。